

氏名(本籍)	やまざき すみこ 山崎 寿美子 (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第 6361 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	カンボジアのラオ村落における家と家との親密性

主査	筑波大学教授	Ph.D.	内山田 康
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	中 込 睦 子
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	鈴 木 伸 隆
副査	京都大学教授	博士(文学)	風 間 計 博

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、カンボジアのラオ村落における過程としての家間関係を研究対象とし、諍いの可能性を内包しつつも日常の細かな交換を通して、親密性が作られる過程をきめ細かに記述して、ラオ村落が家間関係の構築と変容の過程の中で形成されていくことを明らかにしたものである。調査地の人々にとって、家間関係の良し悪しは重要な関心事項である。村人は、成員の往来、食物や労働力の交換を通して「ハック・カン」と呼ばれる親密な関係を維持、あるいは構築しようとする。しかし、家間に諍いが生じることも少なくなく、親密な関係は切断される可能性を含んでいる。著者は、諍いによって家間関係が緊張する状況において、「やりすごし」、「だんまり」、「ただいだけ」等のやり方に見られる諍いへの特有の対処法に着目して、親密性と諍いが併存するような家間関係の網目によってラオ村落が作られる様相を丹念に記述した上で、東南アジアの双系親族社会への接近方法の再考を試みる。

第1章「序論」では、東南アジアの双系親族社会に関する先行研究を検討して、本論の視座を提示する。カンボジア、タイ、マレーシア、ラオス等の東南アジアの双系親族社会は、緩やかに構造化されたまとまりのない社会とされ、その緩やかな社会構造の解明が進められてきた。そこでは、村落を構成するのが個人なのか社会なのかといった、二項対立的な論調が顕著にみられる。しかし、本論の調査地においては、社会に個人が埋没するのでも、主体的な個人が村落を動かすのでもない。本論は、個人と社会の議論を超えて、過程としての家間関係に焦点を当てて、ラオ村落の内実を明らかにしようと試みる。東南アジアの双系親族社会における家間関係については、これまでの研究では社会的単位としての家の重要性や家をめぐる競合の指摘はなされているものの、日常的な家間のやりとりそれ自体を具体的事例から検討した研究は限られている。労働交換や相互扶助をとりあげた研究においては、それを協調関係に収斂させてしまう傾向がみられる。調査地においては、家間の協調関係は常に諍いの勃発を内包しつつも、諍いへの特有の対処法によって、家間関係の破壊を免れている。こうした点をふまえ、本論では、家間関係を協調のみでも、協調か競合かの対立でもなく、文脈の中で片方に強く傾斜しつつも両者が併存するような社会関係として捉えた。

第2章「調査地の概況」では、後の章の背景として、調査地の地理と歴史的背景、生業、信仰、親族と家について概観する。とりわけ重要なのが、親族から家および家間関係への着目の転換である。ラオ人の親族

関係は双系的で、出自集団をもたず、キョウダイ関係を軸に広がりを持つ。そうした状況において家が、生産活動や宗教活動などの基本単位となっている。また、家は女性によって継承され、女性の名声と密接に関連する。こうした女性と家の相互関係、家と家の相互関係こそがラオ村落の基盤となっている可能性が示される。

第3章「家間の親密性と諍い」では、村の日常生活における家間関係に接近する。家同士の親密な関係の築かれ方、それが切断される可能性について民族誌的事例を提示した。家間関係にとって重要とされるのが、ハック・カンと呼ばれる親密な状態である。それは、慕いあい養いあう関係であり、家の相互訪問、食物交換、労働交換や相互扶助といった具体的なやりとりで示される。本論ではこうしたハック・カンの状態にある関係を親密性と記述して、親密性でつながる複数の家間関係によってラオ村落が成り立っていることを示した。だが、村落を構成するのは親密性のみではない。日常的に競合や軋轢は起こり、親密性が切断される可能性は常にある。本論では、このような諍いを含んだ家間関係の構築と変容過程、そして諍いへの特有の対処方法に着目した。調査地では諍いが直接的には表明されず、問題の核心に触れられないまま過ごされる。これこそが、いったんは関係を中断しつつも親密性の再構築の可能性を残しておく最良の方法とされている。

第4章「食施における家間の競合」では、調査地における競合のあり方を、僧侶への食施をめぐる民族誌的事例から提示する。競合は間接的で、関係を破壊することなく、親密性を装いつつ行われる。従来の研究では、食施は積徳行の共同としてポジティブな宗教実践と捉えられてきた。しかし、それが競合を内包する様相を本論は明らかにしている。また、先行研究においては、女性は宗教的劣位にあるがゆえに積徳行に熱心であるとされてきた。しかし本章の事例からは、陰口や責任転嫁、陰でのささやかな抵抗を通して、女性が積極的に男性の決定を動かしている過程が明らかにされる。

第5章「擬制的親子関係の縮小過程にみる親密性の断絶」では、僧侶と村人の間に築かれた擬制的親子の関係に着目する。民族誌的事例に取り上げられる擬制的親子関係は、世俗から離脱しある種の独立性を有する僧侶と、彼の出家に出資した家との関係である。僧侶と家は、当初、家分けした親子のようにやりとりを緊密に行って、親密な関係を築いていた。ところが、僧侶が還俗の決断を擬制的親に伝えなかったことを契機に関係が緊張し、やりとりの相手を互いに乗換えていく。この事例からは、日常的なやりとりの引き下げがラオ人の関係の切断を意味することが示される。この事例は、これまでの研究が述べてきたような、利害にもとづく淡白な二者関係を例証するものではない。本論では、ラオ人の家間関係は淡白に疎遠化するのではなく、その縮小過程において、愛着、嫉妬、不満などの感情が交錯する情動の領域の重要性が示される。

第6章「姻族間関係の緊張と変容」では、親の反対を押し切って結婚した夫方居住する新婚夫妻（ラオ人の夫とクメール人の妻）と夫方親族との関係の変容を事例とし、非友好的な外部者との間でも、軋轢を抱えつつ親密性をつくりだす可能性をひらいておく、ラオ村落の社会性を明らかにする。新婚夫婦が夫方居住を始めた当初、家の内部は緊張していた。家間関係においても、姻族とのやりとりはなされず、夫方も妻方も親密性の構築には消極的であった。こうした中で、陰口は頻繁に起こる。しかし、関係を破壊するような直接的な行為はとられず、「だんまり」で「ただいるだけ」というやりすごしの姿勢が強調される。このようなやりすごしにあって、家の独立や子の誕生が、関係変化の契機となる。双系的な親族形態からすれば、姻族関係は子の誕生によってはじめて安定すると考えられる。本章の事例でも、子の誕生は関係変化の契機の一つとして重要であることを示した。しかし、強調すべきは、家の独立と、問題のやりすごしによって敵対的な他者をも受け入れていくラオの社会性の柔軟性である。姻族間の緊張は、家の独立とともに緩和され、労働交換や食物交換によって家間関係が築かれはじめることで安定していく。このように家の独立は、やりすごしの平行線からよりよい関係の醸成へと転換する契機となっている。この事例からは、複数の選択肢を残しながら家間関係の変化を期待するような、村人のやりすごしのあり方を明らかにした。

第7章「考察」では、これまでの諸事例を総合し、家間の親密性と諍い、やりすごしの積極的な意味、時

間の中での関係形成、家間関係における女性の役割という主要な問題として整理した後、家間関係への着目を経由してラオ村落の形成について検討した。調査地のラオ村落は、断絶の可能性を含んだ家間関係が重層的につながりながらつくられている。家間関係は、家を代表する女性による調整、問題のやりすごし、時間の経過の中で、維持され、あるいは変容していく。ラオ村落は、このような家間関係によって親密性と諍いを併存させながら形成されていくのである。

## 審査の結果の要旨

本論文は、村落から出発するのではなく、関係の中で作られる家および家間関係に着目して、日常の微細な事象からラオ村落を捉えようとした点に方法論的な特徴がある。著者は長期に渉るフィールドワークを通して、クメール語とラオ語を習得し、ラオ村落の中の一つの家の「娘」となり、労働交換、相互訪問、食物交換、だんまり、やりすごしに自ら参与して記述した家間関係とハック・カンの民族誌は、人々の微細な感情の襞にまで肉薄して描かれており、学問的な価値が非常に高い。家間関係を、様々な交換が作る親密性と、親密性の欠如、すなわち交換が途絶えた状態にあっても直接的な対立を回避しながら交換を再開して親密性を作る機会を待つラオの社会性の論理が見事に描かれている。ミクロな交換関係と情動のエコノミーが作る親密性を中心とするラオの社会性の一側面が明らかにされる一方で、ラオ村落の全体像は示されなかったという限界はある。しかし、日常の微細で多重的な交換と親密性への着目から、東南アジアの双系親族社会への接近方法を問い直す本論文は、民族誌として、また方法論的な問題提起として、極めて優れている。

平成 25 年 1 月 11 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。